

目次

はじめに 街歩き文明論——狭く、曲がった、下り坂の愉しみ

13

(1) 下り坂の東京

(2) 武蔵野台地の東崖

(3) 東京に積み重なる歴史地層

(4) 二一世紀東京のタイムトラベラーになる

(5) 巨大再開発と都市の記憶の否認・植民地化

第一日 駅から丘へ、丘から川へ、渋谷川筋を歩く

33

《冒頭講義「川筋から「渋谷」を裏返す》

(1) 現在形の渋谷における「地上」「地下」「上空」

- (2) 渋谷の六つの歴史的地層
- (3) 川筋が貫く渋谷の記憶

《街歩きと路上講義》

- (1) 東大駒場の一二郎池から松濤公園へ
- (2) 渋谷花街から裏渋谷通りへ
- (3) 宇田川暗渠と水没する渋谷駅前
- (4) 「奥渋谷」から「のんべい横丁」へ
- (5) 「渋谷ストリーム」の垂直軸と水平軸
- (6) 稲荷橋前の消えた神社と街
- (7) 猫の裏道からフェンスで囲まれた琵琶池へ
- (8) いもり川筋の大学キャンパスと渋谷氷川神社
- (9) 渋谷・恵比寿は川筋を活かしているのか

《第一日のまとめく渋谷とは何か》

第二日 古川流域で高低差を実感し、街殺しの現場に遭遇

《冒頭講義く江戸東京に「対称」と「対照」を読む》

- (1) 芝増上寺と上野寛永寺
- (2) ポスト鹿鳴館としての芝紅葉館
- (3) 大名庭園のふたつの運命…開域と閉域
- (4) 高さへの欲望と低さの生命力

《街歩きと路上講義》

- (1) 坂を上って有栖川宮記念公園へ
- (2) がま池と東京の「断面図」
- (3) 元麻布ヒルズから麻布台地の神社と教会へ
- (4) 土中から福沢諭吉の遺体が出現——墓の移転
- (5) 三田小山町で「瀕死の街」と遭遇する
- (6) 狸穴坂を抜け、麻布台ヒルズへ
- (7) 東京タワーの周縁に残る紅葉館の痕跡

- (8) 将軍家靈廟のゆくえと芝丸山古墳跡
 - (9) 芝新網町跡地から浜松町再開発の現場へ
- 《第二日のまとめ「開発」という名の街殺し》

第三日 目黒川上流域のふたつの「川」と「まち」の地層

《冒頭講義「世田谷の「まち」とふたつの「川」》

- (1) 下北沢と三軒茶屋・北沢川・烏山川から目黒川へ
- (2) 「シモキタらしさ」と「三茶らしさ」のゆくえ
- (3) 北沢川と烏山川周辺の凹凸地形
- (4) 台地の上の世田谷ナシヨナリズム

《街歩きと路上講義》

- (1) 開発はシモキタらしさと両立するか
- (2) 羽根木公園の丘から北沢川緑道へ
- (3) 招き猫が外国人観光客を呼び寄せる豪徳寺

(4) 世田谷城址から烏山川緑道を歩く

(5) 松陰神社から世田谷線に乗って三軒茶屋へ

(6) 旧日本軍施設から三軒茶屋の「三角地帯」へ

《第三日のまとめ〜川筋がつなぐ世田谷の街々》

第四日 三田用水沿いに織りなされる軍都と自然

《冒頭講義〜地形に見る都心北部と南部の対称性／対照性》

(1) 川と用水の関係…目黒川と三田用水

(2) 寺社と明治の有力者屋敷の混在領域

《街歩きと路上講義》

(1) 目黒川起点と分断される川筋

(2) 西郷家と朝倉家〜代官山の大地主と三田用水

(3) 三田用水が呼び寄せた軍の施設

(4) 歴史の地層が折り重なった都会のオアシス、自然教育園

(5) 福沢諭吉の墓と高台の見晴らし

(6) 三田用水の遺構と環状4号線問題

(7) 東禅寺の路地裏に別世界を見る

《第四日のまとめく用水と川筋のネットワークからの都市再生》

第五日 蟹川と新宿歌舞伎町の「裏」に広がる風景

《冒頭講義く新宿という街の「裏」の「裏」》

(1) 都市を理解する三つの次元——歴史・空間・社会

(2) 歌舞伎町・新宿二丁目から神田川へと流れていた蟹川

(3) 大名庭園の壊滅的变化と新宿の「軍都」

《街歩きと路上講義》

(1) 四谷大木戸から高低差の地形を東京監獄へ

(2) 西向天神社下で暮らした曾祖父山田興松と安藤昇

(3) 蟹川を花園神社、ゴールデン街、歌舞伎町へと遡る

(4) 革命家たちの夢いずこ——大久保・百人町

(5) 陸軍時代の痕跡が残る戸山公園

(6) 穴八幡宮から「高田馬場」、水稻荷神社から神田川へ

《第五日のまとめく革命家たちの街の記憶はどこへ》

第六日 青山・六本木・赤坂の川筋から見る軍都東京

《冒頭講義く丘の上の軍都と谷間の花街》

(1) 軍都からオリンピックシティへの連続

(2) 丘の上の「軍都」を見上げる谷間の花街

(3) 東西南北で地形とシンクロする都心南部

《街歩きと路上講義》

(1) 新宿御苑から渋谷川の跡をたどり直す

(2) 再開発に揺れる神宫外苑の原風景とは

(3) 青山霊園の政治家たちの墓から筈川の谷へ

第七日 都心の谷間から皇居を裏返す

- (4) 「陸軍の街」に今も残る在日米軍基地
 - (5) 赤坂氷川神社周辺の坂をめぐる
 - (6) 赤坂の窪地に潜む「都市の孔」にダイブ
 - (7) 東京の奥深い魅力を伝える赤坂の「ちいさいおうち」
- 《第六日のまとめ》「旧日本軍Ⅱ米軍」の街と大規模再開発

《冒頭講義》「空虚な中心」を囲む四つの谷

- (1) 皇居は「空虚な中心」か？
 - (2) 四つの「死者の谷」
 - (3) 東京の毛細血管…都心南部の小規模河川
- 《街歩きと路上講義》
- (1) 四谷暗坂から山県大貳の墓へ
 - (2) 四谷荒木町の谷間を回遊する

- (3) アニメの聖地とふたつの「於岩稲荷」
 - (4) 鮫ヶ橋の谷間の原風景から赤坂迎賓館へ
 - (5) 清水谷から地獄谷へ
 - (6) 千鳥ヶ淵戦没者墓苑と無名戦士の墓
 - (7) 代官町通りからの絶景を見て皇居へ
- 《第七日のまとめと裏、上と下》

《補遺 鮫川の霊からのお誘い》

本書は、「続・東京裏返し 都心南部編——川筋と軍都をたどる社会学的街歩
き」として「すばる」二〇二三年一月号〜二〇二四年五月号に掲載された内
容を、大幅に加筆・修正したものです。本文中に登場する施設・店舗などの情
報については、取材当時のものです。

取材・構成／加藤裕子

写真／宮崎貢司

写真レイアウト・図版作成／MOTHER

地図作成／クリエイティブ・メッセンジャー

はじめに 街歩きの文明論——狭く、曲がった、下り坂の愉たのしみ

(1) 下り坂の東京

街歩きには鉄則があります。広い道よりも狭い道を、まっすぐな道よりも曲がった道を、平らな道よりも上り下りのある道を選ぶことです。そうすれば、かなりの確率で心地よい街の風景に出会うことができますでしょう。広い道、まっすぐな道、平らな道を行けば、目的地には早くに着けるかもしれません。しかし、それでは大切なものを見失います。街歩きで大切なのは、速さではなく愉しさのために、小道があれば道を曲がり、坂を上り下りし、うねうねと曲がった路地を進み、最初に誰もが予想していたであろうその街の「当たり前」とは異なる街の風景を見出すこと、つまり日常の街を裏返してみるこななのです。

この出会いこそが、街歩きの醍だいご醐味です。思ってもみなかった風景が突然、角を曲がった先にあるのを発見するとき、「ああ、この街はおもしろい」と心から思います。実際、そんな仕

方で東京の街をずいぶん歩いてきましたが、その中で気づいたこともあります。細い曲がりくねった坂道は、必ず上るときよりも下るときの方が快適で、エキサイティングなのです。

上り道ではどうしても坂の頂上に意識が向かいます。ところが下り坂は、下る先の風景が変化に富んだ広がりを見せ、道が湾曲したり、時には階段になっていたりすると、触覚的に街を愉しむことができるのです。そして、その下り坂の先の谷底には、今日でも細かい路地や入り組んだ長屋風の集落が残っていることすらあります。

二一世紀の東京のど真ん中でのことです。そんな下り坂に出会うと元気になります。人間、誰でも一日に二万歩も歩けば疲れてきますが、それでも細い曲がりくねった坂の先でそんな谷間に出会うと不思議に元気が蘇よみがえってくるのを何度も経験しました。人間の体は不思議なものだとつくづく思います。

もともと下り坂には注意も必要で、ぼんやり歩いていると段差に気づかず転んだり、下手をすると崖から落ちて大けがをするかもしれません。要するに、ソフトランディングができずにハードランディングとなってしまうのです。そのようなことは上り坂では滅多に起きません。なぜならば、上り坂ならばぼんやり歩いていて崖にぶち当たっても、それは目の前に「壁」として現れるわけだから、単にその先まで行けなくなるだけです。

ですから下り坂では、風景の変化に気を配り、今まで気づかずに通り過ぎてきた路傍や崖下の景色に、びっくりするような驚きが伏在していたのに気づくのがいいでしょう。そうすれば、それまで目標にしてきた価値観とは異なる、新しい価値に気づかせてくれる風景が、身の回りに広がっていることに気づくはずです。つまり、徐々に世界の見方が転換していくのです。

実は私は、こうしたことは人生にも当てはまると確信しますが、最近では、文明の歴史にも当てはまると考え始めています。つまり、いかなる文明でも、右肩上がりの発展期以上に長くゆるやかな衰亡期は、そこに生きる人々にとって文化的・精神的に充実したものになりうるのです。この発見は、これからの日本が歩むべき道にとって、決定的に重要な意味を持ちます。

(2) 武蔵野台地の東崖

そんな下り坂は、東京のどこにあるのでしょうか。——実は、無数にあります。東京という都市は、武蔵野台地が東京湾に向かい東に張り出し、その東端の崖を中心に形成された都市です。ですから中規模以上の川は概して西から東に向かって流れています。北は隅田川、南は多摩川が境界線ですが、その間を石神井川、神田川、渋谷川（古川）、目黒川、呑川のみかわが流れます。多摩川の南も含めれば、鶴見川や大岡川も同じです。これらはすべて、海底が巨大な「盆地」の東

京湾に流れ込んでいます。

これらの西から東に流れる川が、武蔵野台地を削って複雑な地形を形成してきたのが、原東京です。そこでは削られても残った上野台地、本郷台地、豊島台地、淀橋台地、麻布台地、白金台地、目黒台地、荏原台地、久が原台地といった突端の台地が半島のように張り出し、これらの台地と谷間を流れる川の間、無数の崖や小川、坂道が形成されました。もともと石神井川は複雑に蛇行しているし、渋谷川も支流が多いですから、単純に川は西から東に流れるとはいえません。これは、あくまで模式的な理解です。

冒頭で述べた魅力的な下り坂は、その多くがこうして張り出す台地の際、川筋に向かって傾斜する崖に形成されています。ですからその下りきった先は、大概は川筋です。台地の崖際にはしばしば江戸時代から寺社境内や大名屋敷が広がり、大名屋敷は再開発を免れていれば、今日では大学キャンパスや公園、ホテル、大使館などになっています。しかし、寺社境内は今日でもそのまま残されていることが少なくありません。そして、そうした境内の脇には、しばしば見事な細い坂道が続いています。

まさにそうした寺社境内周辺で川筋に向かって坂道を下り、暗渠や谷筋を這うように歩いていくのが、私にとっての街歩きの基本ルートです。そんな坂道や谷筋、暗渠の道をふんだんに

擁しているのが、東京の中では谷中、上野、本郷、小石川、滝野川、市谷、四谷、赤坂、麻布、白金、高輪といった街々なのです。私は、前著『東京裏返し 社会学的街歩きガイド』（集英社新書、二〇二〇年）で、東京都心北部に散在するそうした半島や谷間、抜け穴のようなルートを紹介しました。その続編である本書では、東京都心南部に散在するやはり際立って魅力的なルートを紹介していきます。

たとえば、後に歩いていくように、都心南部の下り坂の街の代表格は四谷で、飲み屋街として賑わう荒木町では迷路のように多くの坂が窪地の池に向けて集中しています。その迷路をすり抜けて新宿通りを渡ると円通寺坂に出ます。この坂は蛇行する深い谷で、両側の険しい坂を上ると崖から四谷一帯を見渡せます。鶴屋南北の『四谷怪談』所縁の於岩稲荷も近いですが、新海誠監督の「君の名は。」の舞台となった須賀神社の急階段もこの崖にあり、さらにその反対側の崖を下りると、かつて明治東京の三大貧民窟のひとつだった四谷鮫が橋と出会います。再開発を免れてここを流れる鮫川筋にひっそりと息づく街は路地を大切にしており、狭い道に置かれた多数の植木鉢や道路に孔を開けて立てられた物干竿にはためく洗濯物が圧巻です。

また、麻布界限にも圧倒されるほど魅力的な坂道が残っています。有栖川宮公園を広尾駅とは反対側に下っていけば麻布十番方面ですが、「ブラタモリ」で有名になった「がま池」か

ら児童遊園に向けて下りる道があり、その先には昔ながらの長屋街と崖下の細い暗渠の道が今も残っています。このあたりは、元麻布ヒルズなど森ビルによる再開発がすさまじいのですが、巨大再開発で古い街が根底から壊されていくその縁へりで、かろうじて昔の風景が息づいています。

さらに、私がとりわけ大好きなのは、高輪にある東禅寺裏の坂です。東禅寺は、幕末に英国公使館となった寺で、ここで英国公使オールコックは『大君の都 幕末日本滞在記』（山口光朔訳、岩波書店、一九六二年、原著一八六三年）を書きました。水戸浪士に襲撃され、寺は散々な目に遭ったのですが、今も昔ながらの静謐せいひつな風情を残しています。そして、その裏に湾曲して続く一本道の坂が圧巻です。両側が墓地の森の間の孔のような坂道を抜けて下っていくと、その先には長屋風の小さな家々が飛び地のように息づいています。

（3）東京に積み重なる歴史地層

しかしなぜ、これらの細い湾曲する坂道に、私はこれほど魅せられるのでしょうか。それはつまり、そのような細く曲がった坂道を街歩きすることで、都市のタイムトラベラー（時間旅行者）になることができるからです。というのも、都市は実は、現在の層だけで構成されているわけではありません。都市には異なる時代の地層が折り重なっているのです。

しかし、地形が平らだと開発が容易なので、古い地層は容易に破壊され、新しい高層ビルで覆われてしまいます。そうして歴史の痕跡が消されてしまうと、もう私たちは過去と出会うことができなくなります。ところが微細に入り組んだ凹凸地形は、大規模再開発や戦争での空爆、街の破壊行為でしかない都市計画道路建設などに対する頑強な自然の抵抗力であり続けました。要するに、谷間や凹凸地形のある地域のほうが、その街の記憶を残すのです。

ですから武蔵野台地の東崖に今も残る細い坂道を歩くことは、現代東京を覆う地層の亀裂や周縁に目を凝らし、なお貌かおをのぞかせるさまざまな時代に改めて出会うことを可能にします。それらの坂道の脇には、太古の昔や江戸や明治、昭和の痕跡が今も驚くような仕方であたずんでいるのです。そうした痕跡が留め金となり、私たちは今でも過去と対話できます。都市の豊かさとは、そんな時代を超えた対話のチャンネルを、その都市がどれだけ保ち続けているかにあるのです。

『東京裏返し』でも解説したように、東京はこれまで三度にわたって占領されてきた都市です。最初は一五九〇年、徳川家康による占領であり、第二の占領は一八六八年、薩長軍さつちやうによるものです。そして三度目の占領は一九四五年、米軍による日本全体の占領です。そしてこれらの占領の前と後で、東京⇨江戸という都市の組み立てられ方が変化しています。

今日の東京都と埼玉県、それに神奈川県東部は、すべてかつては武蔵の国で、ここは坂東武者たちの世界の中心でした。太古の昔、鉾山採掘や冶金、牛馬の飼育といった新しい技術を携えて朝鮮半島からやって来た渡来人たちは、利根川や多摩川の流域に沿って植民し、土着民と混血化しながらこの地方の支配層を形成していきます。彼らの主流は秩父平氏と呼ばれていくのですが、やがて中世以降、その末裔である畠山氏や豊島氏が、それぞれ鎌倉政権や室町政権に滅ぼされることで力を失います。

そこに外来の大勢力としてやって来たのが徳川家康で、彼はその大軍勢を養うため、江戸の水系を大改造します。やがて徳川家は列島全域の支配権を確立し、その中心の江戸は人口一〇〇万を超える巨大都市となりました。江戸にこれほどの人口がサステイナブルに暮らせたのは、何よりも「水の都」であったからです。同時に江戸は、参勤交代で居住させられていた数十万の武士や奉公人、それに彼らの消費を支える町人たちの死を管理する寺院都市でもありました。ですからこの街には水路が縦横にめぐり、寺町があちらこちらに広がっていたのです。

一八六八年、この江戸から旧幕勢力を蹴散らした外来の薩長軍は、そのまま明治新政府となり、この都市の名を「江戸」から「東京」へと改称しただけでなく、ここを「水と寺の都市」から「鉄道と軍隊の都市」に大改造します。この「鉄道の東京」がほぼ完成するのは、一九一

四年、東京駅が開業したときですが、その後、関東大震災で東京は壊滅し、これを契機に江戸以来の風景が街の表面から一挙に消えていきます。他方、震災後の帝都復興で、東京は西や南に延びる私鉄沿線地域へと急激に拡大するのです。つまり関東大震災は、明治以降も名残をとどめていた「江戸」が、少なくともこの都市の表面からすっかり消えてしまう契機となり、そのことに永井荷風はひどく憤っていたのでした。

そして東京は、一九四五年三月からの、つまり戦争末期の米軍の集中的な空爆により再び廢墟きょと化し、米軍による占領期が始まります。公式の米軍占領は数年間でしたが、それ以降に起きた重要なことは、東京の、大日本帝国の軍都からアメリカの冷戦戦略のための軍都への、そして戦後日本の経済復興を象徴するオリンピックシティへの大転換でした。

一九四五年の敗戦まで、東京には麻布、青山、渋谷、駒場、目黒などの都心南西部を中心に広大な軍用地が広がっていました。明治以降の東京は大日本帝国の軍都であり、「兵隊さんの街」だったのです。それが敗戦で、「米兵たちの街」へと転換していきます。旧日本軍施設は米軍施設となり、その施設の周囲には、つまり赤坂や六本木、原宿などから横浜、横須賀まで、米軍のカルチャーに憧れる若者たちが集まる街が形成されていきます。その延長線上で、一九五〇年代から六〇年代にかけて、ワシントンハイツをはじめとする都心部の施設は返還され、

一九六四年の東京五輪開催を可能にしていくなのです。

この戦後の東京が目指したのは、何よりも「速く高く強い」東京でした。そのために、青山通りをはじめとする道路が大きく拡幅され、川や運河の上に首都高速道路が建設されていきました。稠密な公共交通のネットワークとなっていた都電は、自動車交通の邪魔になるからと廃止されます。さらに西新宿をはじめとする大きな敷地が再開発されて超高層ビル群が建てられ、経済的にも、文化的にも、東京の中心は北東から南西に移動しました。

(4) 二二世紀東京のタイムトラベラーになる

『東京裏返し』は、こうして東京が「より速く、より高く、より強い」首都を目指す中で取り残されてきた都心北東部をフィールドとし、都電荒川線沿線から南千住、浅草、上野、谷中、本郷、湯島、神保町、秋葉原といった街々の風景に、三度の占領を経てもなお痕跡として残る記憶の積層を発見していく試みでした。つまり私は、都市を「街歩き」タイムトラベルすることは、決して文学的懐古趣味でも、昔の風景へのノスタルジーでもなく、「街歩き」という実践を通じ、都市というテクストをペンヤミン的に批評し、東京についてのあまりにも自明化されたリアリティを「裏返し」ていくクリティカルな実践なのだと考えてきました。

そして、本書ではいよいよそうした「より速く、より高く、より強い」東京が今も目指され、とてつもない規模の再開発があちこちで進行中の都心南西部をフィールドとします。本書の街歩きは、もちろん再開発計画が社会問題となった神宮外苑がいえんも含みますが、それだけでなく私たちは、渋谷や麻布、六本木、赤坂、芝、三田、浜松町はままつちようなどの巨大再開発地域の辺縁をすり抜けながら、昔ながらの谷間を歩き、そこに残る都市の記憶の痕跡に遭遇していくことになるでしょう。また、そのような遊歩の延長線上で、新宿から新大久保、早稲田にかけて、あるいは代官山や中目黒から目黒まで、さらには下北沢から豪徳寺、三軒茶屋までの街々を、かつてあった、あるいは今もある川筋に沿って見返していくことにします。

本書の街歩きを貫くテーマとなっていくのは、「軍都」と「川筋」です。「軍都」というのは、第一義的には旧日本軍の軍都です。というのも、赤坂や麻布から青山、代々木、渋谷、駒場、目黒、あるいは新宿と早稲田の間の戸山ヶ原は、戦前は軍都としての東京の心臓部でした。これらの軍都の諸施設は戦後、米軍の諸施設となりますから、赤坂や六本木、青山、原宿、渋谷といった街々の戦後を、米軍の街という観点から問い返す必要があります。

他方、「川筋」というのは、もちろん渋谷川や目黒川の川筋でもあるのですが、それだけでなく新宿歌舞伎町から東大久保、戸山ヶ原、早稲田を経て神田川に注いでいた蟹川かにがわ、四谷の谷

から東宮御所を経て溜池ためいけに流れ込んでいた鮫川、広尾近辺から南へ渋谷川へと注ぎ込むもり川こうがいがわや筈川からすやまがわ、あるいは目黒川の上流をなす北沢川や烏山川からすやまがわを含んでいます。これらの川は、隅田川や多摩川のような大規模河川と異なるのはもちろん、渋谷川や目黒川などとも異なり、都会の小さな谷間を流れていた「春の小川」です。現在では暗渠になってしまっているところが大部分ですが、街歩きを重ねていくと、そのような暗渠の地下になお川が流れていることを感じ取れるようになります。

そうするとハッと気づくのは、二一世紀の東京都心で、若者たちが集まるしゃれた店が増殖しているのが、まさしくこれらの川筋であることです。一九七〇年代、渋谷・パルコを目指して公園通りを歩いた若者たちは、文字通り坂を上ったのですが、二一世紀の東京での若者たちの行動様式は異なります。もう彼らは好んで坂を上ってはいきません。かといって、私が冒頭で述べたような下り坂を愉しんでいるわけでもないのですが、むしろ水平移動、ぶらぶらと川筋を這うように移動しているのだと思われまます。川筋には、小規模ながらちよつとしゃれたカフェやバー、レストラン、さらにはギャラリーや古着屋などが増殖していて、それらの小さな点と点を結ぶような仕方で新しい「若者の街」が渋谷や原宿、富ヶ谷、中目黒、あるいは麻布十番で浮上してきました。本書の街歩きでは、できるだけこれらの川筋でつながれていく新し

い「若者の街」の風景にも注目したいと思います。

加えて、都心南部の水系を考える上で忘れてならない、実は決定的と言ってもいいほど重要なのは、三田用水という上水です。下北沢のあたりで玉川上水から分岐し、東大駒場キャンパスの裏から代官山へ、中目黒から目黒へ、そして白金台地から三田へと、その水路はまさしく本書の街歩きのルートと絡まり合っています。私たちは、本書の街歩きを通じ、人々が江戸から明治にかけて、尾根筋を流れる三田用水と谷間を流れる渋谷川や目黒川の間的高低差をいかに巧みに活用してきたかを再発見していくことになるでしょう。

そして最後に、本書の街歩きの最終日では、東京の「空虚な中心」（ロラン・バルト）たる皇居を目指します。とはいえ、一貫して「東京裏返し」を目指してきた私たちですから、間違っても丸の内から二重橋広場へという正面からのルートで皇居に向かうつもりはありません。皇居への道もあくまで「裏返し」でなければなりません。それはつまり、すでに触れた四谷の谷間、荒木町や円通寺坂、そして四谷鮫が橋からのアプローチとなります。私たちは、かつて地獄谷と呼ばれた中世の葬送の谷を通って千鳥ヶ淵ちどりがふちに向かい、戦没者墓苑でアジア太平洋戦争の無名戦士たちに思いを馳はせた後で、裏側から皇居に近づきたいと思います。

(5) 巨大再開発と都市の記憶の否認・植民地化

さて現在、都心南部のあちこちで、本書で街歩きしていくような都市の記憶が折り重なってきた場が、大規模再開発事業によって破壊されています。その惨憺^{さんたん}たる現状に、私たちは本書で何度も遭遇していくことになるでしょう。そして、そのように再開発されてしまった空間では、私たちはもう街歩きの三原則、つまり細く、曲がりくねり、上り下りのある道をたどって異なる時代の風景に出会うことなどできません。時々、そうした再開発地区で昭和レトロの街かど風景を演出しているのを目にしますが、これはうわべだけのまがい物で、テーマパークのように「歴史」をアトラクション化しているにすぎません。

一九五〇年代、ニューヨーク都心の低所得者居住地域で再開発と道路計画に反対し、効率性や機能性だけを追求する近代都市計画に真っ向から挑戦したジェイン・ジェイコブズは、すでに古典となった『新版 アメリカ大都市の死と生』（山形浩生訳、鹿島出版会、二〇一〇年、原著一九六一年）で、都市が多様性や愉しさを生み出すための原則として、次の四つを掲げました。

第一は、それぞれの場所ができるだけ複数の主要機能を果たしていること、第二は、次の曲がり角までの距離が短いこと、第三は、その地区が、古さや条件が異なる時代の建物を混在させ

ていること、最後が、目的はばらばらで構わないから、そこに十分な密度で人々が集まっていることです。ここでジェイコブズが擁護したのは、都市が多様性の場であること、異なる文化や人生、さまざまな軌跡の出会いの場であることだったと思います。

基本的にグリッド状に街路が続くニューヨークのことですから、ジェイコブズの都市論は、私がここで掲げた街歩きの三原則、すなわち広い道ではなく狭い道、まっすぐな道ではなく曲がった道、平らな道ではなく上り下りのある道が異なる時代との出会いを可能にするという都市論と完全には重なりません。しかし、ジェイコブズが、なぜ街区に異なる時代の建物を混在させることや、同じ場所が複数の機能を混在させていることを重視していたのかを考えれば、彼女も歴史や文化、異なる価値の多層的な場として都市を捉えていたのは明白でしょう。近代を通じ、このような都市の価値を否定してきたのが、速さや高さ、強さへの妄執なのです。

今日では私たちは、ニューヨークのみならず多くのアメリカの都市でグリッド状の近代都市計画がなされたのは、ヨーロッパからの入植者たちが、かつてそこに住んでいた先住民たちを追放し、彼らの生活世界を徹底的に破壊した後の出来事であったのを知っています。つまり、ジェイコブズの思想のさらに底には、それこそ『森の生活』（上・下、飯田実訳、岩波文庫、一九九五年、原著一八五四年）を書いたヘンリー・デイヴィッド・ソローが、マサチューセッツ州ウ

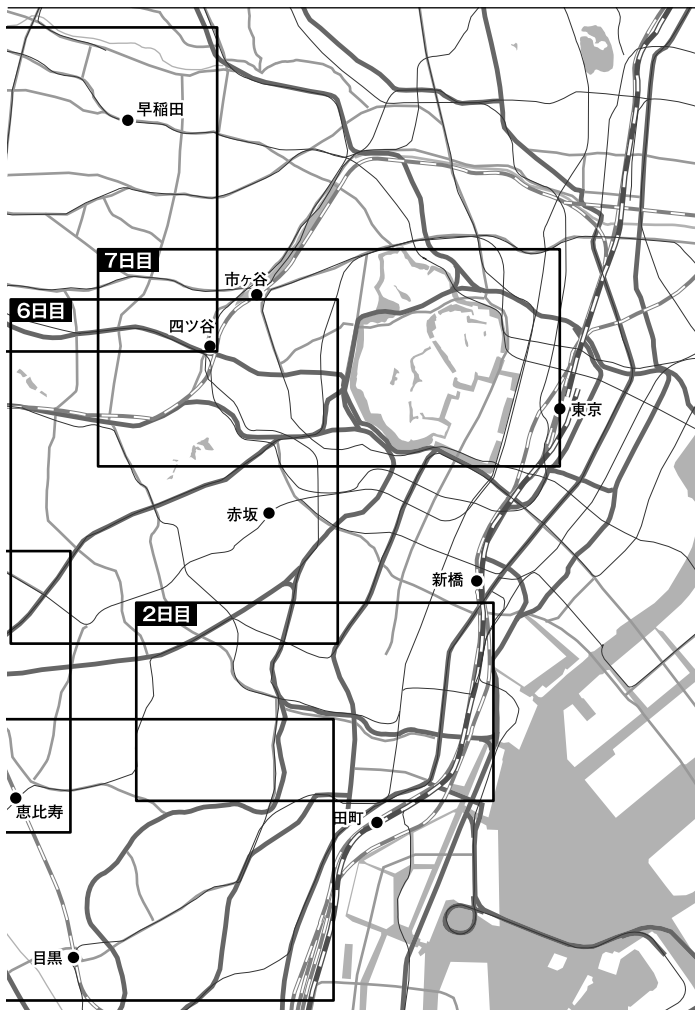
オールデン湖のほりを歩きながら気づいていった、自然と共生してきた先住民たちの世界が伏在しているのです。彼らがアメリカの森や林、草原で描いていたのは、細く、曲がりくねった軌跡です。

そのような空間認識は現代世界でも広く存続していて、人類学者のティム・インゴルドによれば、北極圏に住む狩猟民族のイヌイットは、土地全体を「途切れない表面ではなく、織り合わされるラインの網の目^{メッシュ}として知覚」するそうです。あるいはオーストラリアのアボリジニは、「自分たちの領土を、いくつかの区画に分割できるような表面的領域としてではなく、ラインあるいは『通り道』の『絡みあう網目』として思い浮かべ」ます（『ラインズ 線の文化史』工藤晋訳、左右社、二〇一四年、原著二〇〇七年）。インゴルドは、画家のクレーの言葉に従って、これはつまり「散歩」なのだと言えます。散歩、つまり街歩きにおいて、散歩者は歩くこと、移動すること、動くことそのものです。街歩き⇨散歩することは、単にひとつの場所から別の場所に何かの目的をもって移動することではありません。そうではなく、「世界を通つて、自らの道を糸のように伸ばす^{スレ}」ことなのです。

これに対し、領土を何重にも「占領」してきた占領者たちからすれば、土地は「踏み跡の織物ではなく空虚な表面としか見え」ません。そこにおける移動経路は、「入植および資源採取

用地への人員や設備の投入と、そこからたらされる富の回収」に向けられます。ですから何よりもまず、土地は測量されなければなりません。測量とは占領の一種であり、「測量士が見出す地名はその場所を他から区別するために貼り付けられるのであり、どうやって人がそこに辿りつくのかは無視される」のです。むしろ、測量のために土地の上に引かれる線は、直線的で規則的で「土地を横断して引かれるので、それらは土地に織りなされている居住地のラインを踏みにじり、ずたずたにしてしまう」のです。私たちは本書で、そのような測量の戦後東京や現在の東京における実例に、堤康次郎が郊外開発においてしたことや、現代の大規模再開発、あるいは都心環状線や都市計画道路の建設計画という形で出会うことになるでしょう。

本書で私たちが試みるように、東京の街歩きは、そのような占領された表面に孔を穿ち、幾重にも層をなす過去の記憶世界に深く潜っていくことを可能にします。東京は複雑な地形が幸いして、アメリカ大陸の諸都市以上に、先住民的な地層にまで潜行する余地を、最近まで残してきたのです。前著『東京裏返し』と同様、本書が「裏返し」という言葉にこだわるのは、紛れもなくそのような企図からに他なりません。



7日間の地図

